

平成25年第6回まちづくりトーク

会 議 録

みんなでつくる、これからの防災教育

2014年（平成26年）3月15日（土）

10:00～11:35

【司会（木下）】 では、先ほど浅見さんのほうから、逗子市ではこういう防災対策やっていますというお話がありました。じゃあ、それを我々市民がどれぐらいちゃんとわかっているのか、何が大事かということを経常的に意識しているかというところで、市のほうでもいろいろなことをやっています。高校生派遣の事業もその一つなんですけれども、それ以外に市民団体と協働で、一緒になってやっている活動があります。その一つが減災大学というものを初めとする活断層調査会という団体の皆さんとの協働事業です。それを少し御紹介いただこうと思います。

じゃあ、蟹江さん、お願いいたします。

【蟹江】 皆さん、こんにちは。私は活断層調査会の蟹江由紀です。では、ずし減災大学。まず、なぜ減災かということなんですけれども、防災という言葉がずっと使われていますが、災害を防ぐことは不可能ですから、活断層調査会では減災、リスクを最小にする。これを目標にしています。ずし減災大学は、片田先生が言われている、まず想定にとらわれない。最善を尽くせ。自分の命は自分で守る。このことを目標にしてやっています。

じゃあ、具体的にどんなことをしているかという、まず、関東大震災の被害を検証する。逗子は関東大震災の被害がほとんど残されていません。ほかの地域はいっぱい残っています。なぜ残されていないのかということは、きょうはそれほど時間がないので、説明はできないんですが、とにかく残っていません。

次に、逗子の地盤と地形の特徴。崖崩れが日常的に起きています。もちろん地震でも崖崩れは起きます。それ以外に集中豪雨、台風、こういうときに必ずと言っていいほど崖崩れ。崖がいっぱい崩れて、田越川をせきとめちゃったら、洪水が起きます。そうでなくても、満潮時であれば、今度は高潮、そして川を遡上して、あふれてきます。これが関東大震災の写真です。9月9日の写真です。ここが久木地域で、久木小学校の前の神社、このところとお寺のところ、大きい崖崩れがあります。白っぽく見えているところはがけ崩れです。この辺が逗子駅。ずっとこのあたり、白いのはみんな崖崩れ。それから、このあたりは津波の痕跡が見えます。こちら側から撮っていますので、こっちの崖しか見えませんが、こちら側もいっぱい、もっとたくさん崩れている。これがずし減災大学の最初の年です。ちょうどこの場所ですね。フィールドワークをした後に、危険箇所を発表してもらっています。5年生、6年生の人たちです。まず地形図の読み方、これから始まりました。

次の年は、今度は小坪で、津波どこまで来たということをやりました。このときなんですけど、ここにいる子は去年の発表を見て、次の年、来た逗子小の生徒です。これが小坪の唯一残されて

いる原因ですね。これを見ると、やはりこのあたり、崖崩れ。それから注目してほしいのは、たくさんの方が見えているところ、何でこんな海岸にいっぱい集まっているかということ、小坪では地震が来たら砂場に逃げろと言われてきました。これが代々伝わっています。崖崩れと地割れが起きないように、砂浜に避難をする。これは材木座、坂ノ下、鎌倉でも同じでした。同じ地形ということ。地盤も同じ。それから、これはその後で、逗子小でやった授業です。1年生に減災の授業をしています。1年生は、何で逗子小は倒壊したか。地盤液状化だよということで、地盤液状化の実験と、隣では、これが地盤液状化。こちらのほうでは稲村の火、命が大事だという紙芝居、1年生の授業です。それから、その後、逗子小の先生たち、もう60名ぐらいでしたかね。減災大学でつくったハザードマップを使って危険箇所のチェックを行いました。こういうようなフィールドワークは、久木小学校の教職員が行っています。これは今、皆さん、石巻の方もいらしているということですが、石巻出身の千葉さんがつくった接触立体地図です。接触立体地図で、これ見ていただくと、青い部分、これが駅の部分ですが、逗子は非常に低い。この辺が津波で浸食された可能性があるということを千葉さんは指摘されました。千葉さんは、皆さん御存じ、門脇小学校の出身です。私も昨年、門脇小学校に行ってきました。非常にすごい状況でした。千葉さん、もう一つおっしゃいました。タイムマシーンに乗って石巻に行ってください。タイムマシーンなんだよ、新幹線は。なぜかわかりますか。未来の逗子の姿が石巻にあるよ。そういうことです。ですから今、皆さん、石巻に行ってください。皆さん行かれました。未来の逗子の姿を見てきているんです。ですから、3年たってようやく安心だと思わないでください。大災害が起こる日が近づいた。そういうふうに思ってください。また、今、向こうにいらっしゃっている方は、タイムマシーンに乗って、現代に戻ってきてください。そして、それを皆さんに伝えてください。

まとめです。逗子は集中豪雨、台風、崖崩れ、洪水、高潮、これが日常です。ですから、もう家庭の中でふだんの生活で危険を教えてください。それからハザードマップをつくること、大事です。常に自分がここにいる、今こういうときに地震が来たらどうなるだろうということを意識して歩いてください。そういうことの積み重ねです。それから、今の子どもたち、自然から学ぶ機会が少なくなっています。いろいろ崖に登ったり何だりしていると、ちょっとは学べるんですけども、学ばせん。あと一つ、私は昨年、かなり小学校とも交流しました。すごく授業で絶対必要だと思っています。ところが、できないんです。組み込めない。きょうも防災教育ということで、こういうふうに来ているわけですが、いつもいつも思うことですが、教育の

方がいらっしゃいますか。

【司会（木下）】 学校の先生。きょう参加者の皆さんの中には…あ、いらっしゃる。ありがとうございます。

【蟹江】 もっとね、何でそういうことができないのか。例えば古墳の観察、こういうのは授業に組み込まれている。そして、何で防災、命を守ることが何で授業でできないのか。古墳のほうだと、こちらは教育委員会の管轄。防災課などで、市の縦割り行政、こういうのが課題なのかなということをやっていけばやっていくほど、いつもそれを感じています。

【司会（木下）】 どうもありがとうございます。蟹江さん、どうもありがとうございました。（拍手）教育、伝えることの中身だけでなく、伝える制度、仕組み、仕事のやり方、そこも工夫していかないと、うまくいかないということです。ありがとうございました。

次に、逗子市がいろいろ教育、意識啓発活動をやっている中で、社会教育課というのがあるんですけれども、そこでもいくつか事業をやっています。それを少し御紹介したいと思います。社会教育課の主催講座、いろいろな講座を行っています。現代的課題は扱う社会教育講座や人権問題に関する啓発を行う人権教育講演会のテーマとして、被災地のことをいろいろ取り上げて講座をやっています。こんなチラシ、もしかしたら見た方もいらっしゃるかもしれません。奇跡のボランティア組織という、被災地で行われた現地の活動の紹介ですとか。いろんな幅広い世代の方が参加されて、新しい市民社会のモデル、その可能性を感じたというようなお話がありました。あと、片田先生という方が、子どもたちに釜石市で防災教育を行って、小・中学生の99.8%が難を逃れたという事例をつくられた先生の講演会が先にありました。

これも幅広い方が参加されて、市民の自助意識の大切さを感じられたようです。それからあと「石巻にいた時間」という演劇があるんですけれども、それを写真でスライドショーで見ていくというものがあったり、これはまた支援のあり方について考える会がつけられた。それから、映画と講演で、小学校の避難所をテーマにしたドキュメンタリー映画の上映の講演会があたり。映画はテレビと違って、本音が聞けたり、人の心を感じることができた、そういった話があります。

社会教育課としては、市民への啓発事業として非常に有効であったと言っているんですけれども、多くの方が関心を持ってくださって、多くの方が参加してくださいました。来年度も社会教育課としては、こういった講座をやっていく予定です。

実は、今御紹介したのは、市が行政として取り組んでいる、あるいは行政が市民団体と一緒に

協働事業としてやっているものなんですけれども、それ以外に市民のグループが実際に自分たちの力で、自分たちの問題意識を持って行動している、行政をあまり当てにしないでもやっているという活動がいくつかありますので、それを2つほど紹介していただきたいと思います。まずは高校生、中学生が中心になってやっている「3.11つなぐっぺし」という活動です。須田葉さんです。よろしくお願いします。

【須田】（拍手）3.11つなぐっぺしボランティアメンバーの須田葉です。よろしくお願いします。（拍手）まず、3.11のボランティアチームについて説明させていただきます。3.11つなぐっぺしは、昨年9月に逗子葉山青年会議所というところで中学生・高校生対象の被災地支援ボランティアバスツアーを行い、約40名の中高生が岩手県石巻市や陸前高田市に行き、現地で子ども安全課の手伝いや、泥出しのボランティアを行ってきました。

私たちが行ってみて、聞いて感じてきた被災地の現状は、まだまだ多くの支援や気持ちが必要だということで、東日本大震災の風化防止をしようと、現在24名のメンバーが登録し、発足し、大人のサポーターが2名ついてバックアップをしてもらっているところです。

イベントについて話していきます。まず、私たちが考えたのは、被災地の方とお話をもっとしたいということでした。でも、被災地に行くには費用も時間もかかり、なかなか難しいというのが現状にあります。そして、一番身近に感じられるものは何かとみんなで考えたところ、食べるということなのではと考え、被災地の方に被災地の郷土料理を習ったらどうかと企画しました。たまたまですが、サポートメンバーである服部さんのつてがありました宮城県女川町で、ウミネコハウスというところで頑張られている八木ジュンコさんをお話聞くことにしました。ちなみに、ウミネコハウスは宮城県女川町に建てられた仮設住宅に住む方々や、女川町のお母さんたちが古いTシャツで布草履をつくる場所としてつくられたプレハブハウスです。女川は観光地の一つとなっております。

当日に至るまでの経緯なんですけど、こちらチラシ配りの様子です。逗子駅前でのこの宣伝としてチラシを2回ほど配りました。そして湘南ビーチFMというラジオで告知させてもらったり、つなぐっぺし一同、一生懸命PR活動をしました。こちらはチラシ配りの様子です。そして本番当日、前日大雪が降ったにもかかわらず、約60名もの方が参加してくれました。

まず初めに、八木さんのお話を聞きました。こちらがその様子です。八木さんは、震災直後から今に至るまで現地の様子や仮設住宅の様子などをお話ししてくれました。こちらは話しているところです。そして、その後は7～8名の班に分かれて、八木さんにつみれ汁を教えていただき

ました。各班ごと、さまざまなメニューの決め方など、手拭いの大きさなど、すごいばらばらで特徴のあるつみれ汁が完成しました。味付けは、だし入り醤油のみと、とてもシンプルなものだったんですけど、とてもおいしくできました。こちらはその様子です。こちらが完成したつみれ汁です。参加してくれた方々も、楽しく、おいしくつくれたようで、つなぐっぺしとして、とてもうれしかったです。こちらの様子は、お配りした東京新聞さんにも載せていただきました。

次に、ほかの活動についてお話しします。先日3月11日にオールズシムーブメントという、被災地復興イベントに参加させていただきました。こちらでは、八木さんに習ったつみれ汁と復興へのいつもやっている綿菓子販売させていただきました。とても好評をいただいて、おかわりをしてくれるお客さんなど、たくさん買ってくれました。綿菓子も、やはり子どもたちがたくさん買ってくれました。そして、夕方のステージの写真はないんですけど、こちらが大鍋でつくったつみれ汁です。ネギを20本と豆腐8丁など、すごい頑張っでネギを切りました。夕方のステージは、復興への思いを込めて、2曲ほど歌わせていただきました。こちら、歌う班と演奏する班で分かれて、「また会える日まで」と「上を向いて歩こう」を2曲やらせてもらいました。これに至るまでは、毎回、月に一度定例会を行っておりまして、こちら会議の様子なんですけど、やっぱり中学生・高校生が中心となっていることもあって、結構賑やかになっちゃうときがあったんですけど、リーダーというか、2人いるんですけども、その子がいつもちゃんと仕切ってくれています。これが会議の様子です。

最後に、私たちつなぐっぺしは、これからも被災地の風化防止と被災地の皆さんを応援できるように頑張っで、次のステップに進めるように頑張っでいきます。そして、中学生・高校生というこの地域の仲間との絆を大切に、この活動を続けていきます。こちらのマークは、リーダーでもある小島さんという方が、どこでもつながるというテーマで書いてきてくれたマークです。つなぐっぺしがイベントなどで着るこちらのパーカーの後ろにも印刷してありますので、何かありましたら、こちら、青いパーカーはつなぐっぺしだなということを覚えてくれたらうれしいです。以上になります。（拍手）

【司会（木下）】 はい、須田葉さん、どうもありがとうございました。先日こちらの会場で3.11関連のイベントいろいろあった中の一つで、いろんな市民団体、被災地支援をしている市民団体の方が集まったときに、つなぐっぺしの関係の中学3年生、この間卒業したばかりで、そんな子が、課題として挙げていたのが、自分たちのように被災地を身近に感じているものと、周りの友達との温度差がなかなか埋められなくて、そこに悩んでいるんだという話をしました。被災地

を見たことがある、あるいは被災地にそういう人がいるという人、自分と、そうじゃない、逗子  
であの日を体験しただけの周りの友達との感覚の違い、どうしてもわあっという思いが伝えよう  
としても伝えきれない難しさというのを感じているんだというお話がありました。それも広い意  
味での防災教育の課題かなと思います。栞さんはその辺は何か、どうしたらいいのかなというの  
は、考えありますか。

【須田】 今は3.11の大きなイベントが終わって、つながっぺし自体もすごい地域自体も結構薄  
れてきてしまうというのをこの前、話したんですけど、これから風化防止で薄れていくこの被災  
地の現状を、トークイベントでもいいですし、何かしら今まで撮ってきた写真をスライドショー  
などにして、みんなに来てもらった人に話しながら見てもらうという形でもいいですけど、何か  
しらの形でそういうイベントをこれからやりたいなど、次の定例会の宿題になっております。

【司会（木下）】 ありがとうございます。ぜひ頑張ってください。中高生の活動を紹介してい  
ただきましたけれども、大人のグループも負けずに活動しているグループがあって、その活動の  
紹介を、逗子30'sプロジェクトの平元さんからお願いします。

【平元】 皆さん、こんにちは。新宿の4丁目に住んでいる平元といいます。30'sプロジェクト  
というので、子育て世代が進める防災…教育というほど大げさなものではないんですけども、  
事例を紹介したいなと思って、きょうまいりました。

その前段として、さっき被災地に行かれている方が、きょうかなりいらっしゃるということで、  
つながっぺしで行ったりとかされているというお話ありましたけれども、僕も何回か行って、一  
番記憶に残っているのが震災から半年後の石巻と女川に行ったんですね。それは避難所、当時お  
家がなくなって、公民館とか体育館が避難所になっていたんですけども、そこの支援というよ  
うな形で行ったんですけども、そのとき見た女川の海が忘れられなくて、さっき蟹江さんか  
らのお話で、地形がというお話ありましたけれども、ものすごい穏やかな海だったんですね。その  
海を見たときに、僕はすごい怖いなと思いました。逗子海岸って、僕、穏やかな海だから、マリ  
ンスポーツをするのすごい好きなんですけれども、それとすごい重なって見えました。やっぱり  
いつか来るんだろうとか、その危機感というのがずっと自分の中に残っていて、それを、そう  
いう思いもあって、細く長く、ちょっと続けていこうというのでやっている取り組みというのを  
これから紹介したいと思います。

まず、30'sプロジェクトって何なのかということで、簡単に自己紹介させていただくと、2年  
程前、市民協働課さんの呼びかけで、地域を越えて30代前後の、20代とか、あと40代の方もいら

っしゃるんですけど、30代前後の人たちで交流をしたりとか、金曜日の夜にちょっと交流祭みたいなのをやったりとか、あとは夜回りハピランププロジェクト、趣味でランニングをする人が多いので、それだったら一緒に、例えば月1回、日にちを決めてランニング、夜にランニングをするのと、あとついでに防犯活動みたいな形で、ちょっと防犯ベストとか、ぴかぴか光るようなベストを着て走ったりしています。あと、これは逗子1丁目自治会って、OKストアとかの近くの、あのあたりの自治会なんですけれども、そこが毎週火曜日に火の用心で夜回りというのをしているんですね。それにちょっと参加してもらいながら、その後、大体夜9時から9時半ぐらいなので、会社帰りに参加して、その後ちょっとみんなで飲みに行くとか、そういった、緩やかに30代前後の世代で、緩やかに交流をしながら、あとは長く住むことも考えているので、少しでも地域にいいことができないかなというような活動を、細く長く緩やかにやっている団体です。

その中でやったのが、30代の危機管理ということで、今、交流センターに張り出しをしているんですけど、3月11日、震災が起きた2011年の3月11日のときに、30'sの今集まっているメンバーが全部で緩やかなのを含めて50人ぐらいいるんですね。あのときどうしていたか。そこから、あれからどういうふうになったかというのをみんなで、ちょっと共有するというのを、去年の3月11日にやってみました。30'sのメンバーで、大きく分けて、あの3月11日に、逗子にいた人と、逗子以外にいた人と、分かれるんですけど、多いパターンとしては、それこそみんなのお父さん、お母さんでもそうかもしれないですけど、都内に勤めている人がやっぱり多いんですね。3月11日の特にあのときも3時少し前だったので、まさに仕事をしている最中です。例えばこの方、田中さんというメンバーなんですけれども、この人は夫婦共働きで、荻窪に勤めていらっしゃって、娘さんが3人いらっしゃいます。うち、当時はたしか保育園に通っているのが2人、小学校1年生が1人というような状況だったんですけど、まさに震災が起きて、もちろん被災地も被害を受けましたけれども、我々も記憶に新しいとおり、帰れなくなったりとか、停電も起きて電車がとまって帰れなくなったりしました。まさにこの方もそうで、荻窪の会社に夫婦でいて、娘3人とも保育園にいたんですね。ただ、最初携帯電話なかなかつながらなかったんですけど、何とか保育園に固定電話でつながって、全員の無事を確認をして、それでも自分自身は帰ることができない。それで、しかも娘の無事というのも、何とかつながったということで状況が把握することができない。なので、いろんなつての中で、保育園の友達に預かってもらって、子どもを預かってもらって、何とか翌日に帰ってくることができたというような状況だったんですね。



やっぱりこういうパターンの人がすごい多くて、特に逗子って、やっぱり都内とかに勤めている人が多いと思うので、そういうのを、彼だけじゃなくて何人もいたので、そのときどうだったというのを情報を共有しています。さらにそれから、あれからどういうふうになったかとかで、防災グッズいろいろ仕入れましたとか、そういう話があって、あとこれは僕なんですけれども、僕は今、逗子の市役所に勤めているんですね。部署は全然防災とは関係ないなんですけれども、やっぱり市の中でもいろんな混乱状態があった。当時は僕も保土ヶ谷に住んでいたもので、家に帰れなくなったりとか、そういった問題もあった。このあたりを去年の3月11日に共有をして、張り出して、いろんな人からさらにプラスで得て、こういった情報ももらって、去年に一度ワークショップというのをやってみました。防災課の方に来ていただいて、最初のお話しされたようなお話をさせていただいたりとか、あと、改めて集まったこのパワーポイントを見ながら、じゃあみんな、やっぱりみんな同じなんだねとか、あと、気づかなかったけれども、こういうところがあったんだねというのを共有をしながら、自分たちができるような防災対策、減災対策というのは何かというのを話し合ったというようなワークショップをやりました。

さっき風化させちゃいけないというような話が須田さんからありましたけれども、やっぱり人間って、忘れちゃう部分がある。僕自身も日々過ごしていて、震災が起こった当時とか、あと被災地によく足しげく通っていた時期と比べたら、考える時間というのは、やっぱり正直なところ少なくなってしまうている。ただ、絶対につなげていかないといけない。これはやっぱり忘れてはいけないという意味で、今後の課題として、どう継続していくかと、あとやるメンバーをどういうふうに広げていくか。その中でやっぱり30代という世代は、ある意味ではかなり仕事も忙しくなってくるし、あと子どもができて、僕も今1歳の娘がいるんですけれども、土曜日・日曜日、忙しくなったりとか、なかなか時間がない中で、どうやったらそういうのに参加できるかとか、あと家族連れで参加することで、家族のレジャーも兼ねながら、家族のちょっとした楽しみも兼ねながら、結果的に防災について学べているとか、何かそういった機会というのを30'sとしてつくれたらなというのを今、メンバーで話し合いながら模索をしているところでございます。

なので、きょうこの後、ワークショップがあるみたいなので、それで皆さんからも話を聞いて、それに役立てたいなというふうに思います。簡単ですが、以上です。ありがとうございました。

(拍手)

【司会(木下)】 平元さん、どうもありがとうございました。楽しめる要素、参加しやすい工夫ということ、その辺はこれからの防災教育、意識啓発、考えていく上で、とても大事なポイント

トだろうなと思います。それを具体的に、じゃあどうしたらいいものができるかというのを、ここから残りの時間で皆さんに知恵を絞っていただきながら話していきたいと思います。

グループでざっくばらんにおしゃべりをしてもらおうかなと思っているんですけども、せっかくなので、少し何かふだん話したことのない人と違った発想に触れるのもいいかなと思います。こちらの蟹江さん御夫婦、ちょっと別のテーブルに分かれていただいて、活断層調査会同士、同じテーブルじゃもったいないので、あいているところに移動お願いします。それから、前2つのテーブルの若い人たちは、せっかくなので、若い発想をおじさん、おばさんにも分けてあげてほしいので、（笑）じゃあボランティアで各4つのテーブルがあるので、4人ちょっと勇気のある人、動いてもらえますか。よろしくをお願いします。4つのテーブルに1人ずつ、どこか動いてもらえるとありがたいなと。あと、市役所の職員の人も、せっかくなので、わきで立っているよりは、ぜひ中に入ってください。防災課のお2人も、耳を傾けていただければと思うので、テーブルのほうへお願いします。高校生のところに。副市長もぜひテーブルに入ってください。

じゃあ、いろんなふだん接したことのない方も同じテーブルに座っていただいたので、簡単に自己紹介をしていただいたほうが話しやすいかなと思います。1人15秒ぐらいの簡単なPRで構いませんので、どなたからでも、じゃあ私からやりましょうかという感じで、1人15秒ぐらいの簡単な自己紹介を各グループで4人、5人をお願いいたします。

（各グループ 自己紹介）

あと1分ぐらいで全員自己紹介できるようにお願いします。

どうでしょう、大体自己紹介できましたか。ちょっと待ってというグループありますか。大丈夫ですか。ありがとうございます。

それでは、ここからちょっと前のスクリーンをごらんください。前のスクリーンをごらんいただきながら、これからどういうふうやっていくのというのを御説明したいと思います。きょうは寄せ書きカフェというやり方で意見交換をしてみたいと思います。初めての方も、そんな難しいやり方じゃないので、ちょっと見てください。寄せ書きカフェとは、街角のカフェでおしゃべりを楽しむように、リラックスした雰囲気の中で参加者全員が意見交換を行うワークショップのやり方です。この部屋がカフェだと思って、ゆったりした気分で、もうおしゃべりしてください。どういうふうやるかですけども、4～5人で一つのテーブルを囲んで座って、簡単に自己紹介をしていく。ここまでは今、やっていただきました。設定されたテーマについて話をしながら、気がついたこと、おもしろいと思ったことなどをテーブルの上の模造紙にマジックで自由に書い

ていきます。まさに寄せ書きのように。だから、だれかが司会でだれかが書記をやるというんじゃないくて、全員がどんどん寄せ書きみたいに書いていく。なので、テーブルの上にマジックがあります。1人1本、好きな色を選んでください。1人1本、必ずマジックを持ってください。水性なので、裏映りはしませんから、大丈夫です。テーブルごとに同時並行で寄せ書きをしながら、おしゃべりをする。こんな感じになります。

大事なことは、ほかの人の意見を否定しない。それももしかもしれないねというふうにおおらかな気持ちで受けとめてみてください。1人で演説しない。全員が発言できるように配慮をする。話すだけでなく、どんどん書く。ここが大事なところです。おしゃべりして、それだけで終わってしまうと、後で何話したのか、何が成果かというのが残らないので、書きながらしゃべってください。文字で書くのが難しかったら、絵であらわすとか図であらわすとか表であらわすとか。ほかの人の発言中にも書いて構いません。何かほかの人の話を聞いていると忘れそうだったら、思いついたときにどんどん書いちゃう。あるいは、ほかの人がおしゃべりに夢中になっていたら、その人の言っていることの中で、あ、なかなかいいなと思ったら、それを書きとめてあげるというのも、とてもいいかなと思います。ほかの人が書いたものに、例えば矢印引っ張って書き足すというのもオーケーです。ただし、消してはだめ。ほかの人が書いたのを、これ違うよとやって、塗りつぶしたりしないように。書き足していくのはありですね。こんな感じで、四方八方から寄せ書き風に何かしら書いたものができ上がっていくんじゃないかと思います。

意見が大体出尽くしたら、模造紙の中から、ああ、やっぱりこれが大事なんだよねというのをグループで話し合っ、見つけて、目立つように赤で丸つけるとか、印つけていってください。最後は参加者全員で、うちのグループではこんなところが大事だというのが出ましたよという、共有をして終わりたいと思います。では、やってみましょう。

ということで、きょうの寄せ書きカフェのテーマ、3.11東日本大震災を経験した、あるいは被災地を訪ねて、被災地の問題に触れて、私たちが学んだ大事なことは何なんだろう。防災教育というけれども、教育で、大事にしないといけない、私たちが学んだ本質的な大事というところ、それをまず確認するところからいきたいと思います。いきなり教育のあり方に入る前に、ちょっとこれを10分ほどお話ししたいと思います。じゃあ、模造紙の真ん中に、私たちが学んだ大事なことはと、ちょっと書いてみてください。適当な大きさに。あまり大きく書くと、ほかのことを書く場所がなくなっちゃうので、適当な大きさに結構です。

それが書けたら、もうあとはカフェの雰囲気でおしゃべりしながら、どんどん寄せ書きをし

ていってください。まず、時間は10分ぐらいとりたいと思います。もう書き始めているグループもあります。どんどん簡単に書いていってください。模造紙が白いところが見えなくなるぐらいの勢いで書いていってください。

( 寄せ書きカフェ開催 )

なるべくたくさん書いてください。他のことを文字にして残してください。

皆さん、すいません。ちょっと手をとめていただけますか。今、私たちが学んだ大事なことはというテーマで10分ほど話していただきました。いろんなポイントが出てきていると思うんですけども、ここからはさらに、じゃあどうするの、こういうことが大事だ、それを意識していったら、じゃあそれをどのような工夫をしながら伝えていくべきか、こういう伝え方をしたら有効だ、うまく伝わる、あるいは10年後、20年後にもというようにすることも考えながら、なるべく具体的に。先ほど参加しやすい工夫をとるか、レジャーの要素を盛り込んでとかありましたけれども、それをさらに具体的に、じゃあレジャーって、どういうのがいいのか。そこまでいろいろ具体的なアイデアを考えていただきたいと思います。さらに余白に、じゃあこの大事なことを伝えていく伝え方、どのように伝えていくべきか、残りの時間、また10分ほど話していただきたいと思います。よろしくお願いします。

余白にどんどん書いていってください。

なるべくたくさん書いておいてください。せっかくのアイデアが消えてなくならないように、書き残しておいてください。

それでは、皆さん、まだ出尽くしてはいないかもしれませんが、ここまで模造紙に出てきたアイデアをちょっと見て、これが大事だよねというのに印をつけてみてください。グループで話し合いながら、私たちが学んだ大事なことをどのように伝えていくべきか、これがいいねというやつ。印をつけてみてください。

3つでも4つでも結構です。これが大事だよねということ。印つけてみてください。星印をつけるとか赤で囲むとか、目立つようにしてください。

はい、いかがでしょうか。これが大事だねというのを大体浮かび上がってきたでしょうか。それを少し、残りの時間で共有しながら話をしたいと思います。平井市長、ここから全体司会してもらいながら、一緒に話を。途中でうまく現地とつながったらやりますので、それまでお願いします。

【平井市長】 一応このトークは、市長と皆さんがトークしようという、それを目的にやってい

るということなので、残りの時間、せっかく皆さんが寄せ書きカフェでいろんなアイデアを出してくれたと思うので、それぞれのテーブルから、じゃあここが大事だよというのを言っていただけるといいな。どこからいく。あ、手が上がった。

【市民】 私たちは、大事だなというふうに思ったのは、気楽さというか、やっぱり何か避難とかそういうふうな、ちょっと堅苦しいイメージがあるので、少しでも気楽に、例えばツイッターとか、そういうネットワークを通して、もっと何か避難訓練とか、そういうのの活動を活発にさせたり、あと中高生の力をもっと使うことです。あと、反応、被災地へ行ってきたよって反応をしてくれた。どういう取り組みしたのとか、そういう人たちを大切に、その人たちからもっと輪を広げていくことが大切だなと思いました。（拍手）

【平井市長】 はい、ありがとうございます。次は…手が上がりました。高校生、積極的でいいね。大人のほうが何かたじたじだね。

【市民】 僕たちはまず、震災で学んだことということなんですけど、近所づき合いと自助・共助の関係ということがやっぱり大事だなというのを再現しましたということがありました。あと、やっぱり、それからどう伝えていくかということなんですけど、家族の中での話題に出す。どれだけ家族の中で共有していくかというのは、やはり語り継いでいくという、世代で語り継いでいくというのが大事なのかなという話になりました。そのためには、例えば家族で被災地に行ったりとか、場を共有して、やっぱり感じたことをその場で共有するというのが、言葉で聞くよりも大事だなという話を聞きました。以上です。（拍手）

【平井市長】 はい、ありがとうございます。家族の中のコミュニケーションが大事だと。被災地に行くという意味では、最近修学旅行で被災地に行くというのが出てきましたよね。これもすごくいいことだね。さあ、次、手が上がりました。

【市民】 私たちが学ぶ大事な事柄って気づいた点ですが、情報をいかに伝えるか。私たちが実際に地震に遭ったときに、停電がまず最初に始まり、その停電が地震だということは理解できていても、どういう状態で、ほかの地域がどういう状況で停電が起こり、その停電が一体いつまで続くのか。その停電から、ガスは使えるというおうちが多かったみたいですけど、オール電化とか、そういうおうちだと全く電力がない状態だと、食事するのも暖をとるのも厳しい中で、情報が伝わってこないと、自分たちの中で不安になる。やっぱりそういう情報がいかに、どういうついでで伝わっていくか。そういうことをこれからいろいろ考えて、次起こったときに、あ、また停電だ、どうしようじゃなくて、あ、停電が起こった。じゃあ今どういう状況なのかというのが、

どこか得られるかというの、そういうのを自分たちで行動して、自分たちで情報を共有していこう。その中で情報の共有がされ、地域のつながりが大事だなということがあります。実際、この間すごく大雪が降ったじゃないですか。その大雪ですごい地域の人たちがみんな一緒に外に出て雪かきをしたり、動けなくなった車を地域の人たちがみんな押したりとか、そういう状況を見ると、なかなか地域の中でも、自分たちがつながれているんじゃないかという意見が出まして、私たちの学んだことは情報の共有とか、そういうのに早くできることだと思います。

次に、そのことをどう伝えていくかという話で、私たちの班では結構その意見がすごい出たんですけど、やはりイベントを何か、つなぐっぺしの皆さんがいろいろイベントをやってくれるという話をしていたので、そのイベントに自分たちで出向いて、今のようなことをしていくのと、あと、学校ぐるみで支援をするというのが出まして、ある高校では姉妹校が石巻のほうにあったりとか、地域とかそれだけではなくて、学校でつながっていくと、さらにそういう学校自体での共有とかが広がるなって思いました。あと、今そういうことを伝えるのに、小学生がいいんじゃないかという意見が出まして、なかなか今の中学生と高校生に何かを伝えようとして話をしても、なかなか興味がわからない。そういった高校生が多いんじゃないかって思います。小学生のうちから授業にそういうプログラムを組み込んだりすると、小学生のときに持った印象とかというのは、これからつながっていくんじゃないかなと思います。なかなか高校生とか難しくても、小学生のうちからいろいろなことを埋め込んで、頭においてもらおうと、そこから関心が薄れていくというのをどんどんなくなっていくんじゃないかなと思います。小学生向けに有名人を呼んできたりとか、もしできればそういうことをしてでも、小学生たちにうまく伝えていけたら、これからの復興にも、これからの復興に対する意識も高まっていくんじゃないかなという意見が出ておりました。以上です。（拍手）

【平井市長】 パーフェクトだね。パーフェクト、すばらしいね。逗子の市役所へおいで。（笑、拍手）次にどうでしょう。いっぱい書いてありますね。すごい。

【市民】 1つずつ話していきます。まず、常に考えるということと、人ごとではないということです。あと、想定内はないということで、常に想定外なことがこういう震災のときに起こるので、想定内だったとかはないので、常に想定外と思うようにします。

あと、引き波のほう怖いというのは、私、2回被災地に行ったんですけど、そのときの語り部さん、どちらとも言っていました。津波が一回来て、それで安心するのではなくて、引いてくる波で8割方、大体家とかが流されてしまうというのを聞いたので、引き波、二次災害ですね、

二次災害に注意することが大事だと思いました。

あと、自分の命を最優先という意見が3個ぐらいあるんですけど、人のことを助けようとして2人とも死んでしまったら意味がないので、まずは自分の命を最優先して考えることが大事だと思います。私自身、ボランティア活動をしていて思ったことがありまして、ほかのボランティア団体と意見を交換してつながるといことです。中学生、高校生が多い中で、大人の意見を聞くということはとても大切だと思います。活動する際に何が大切かを考えるということで、話し合いをしているうちにだんだん話が変わってきちゃって、自分のやりたいことに移ってきちゃうことがあるので、何が大切かを考えてやることが大事だと思います。現地の方が言っていたんですけど、現地を実際に見ることだけでも意識が変わるといことなので、なかなか難しいんですけど、現地を見てほしいということでした。これ、一つ例があって、すごいああって思った話なんですけど、現地の方がいろんなものが送られてくる中で、お皿とかを洗うときに何も物がないということで、スポンジが届いたということなんですけど、洗剤が一個も届かないということがあって、そうすると何もできないということがあったので、送るだけという自己満足にならないということで、送っただけじゃなくて送った後、大丈夫かとか、送った後のことを考えて、そういう協力をしてあげればいと思います。

**【市民】** 今の話につながるんですけど、支援するときに現地に行って何かをするのでも、物資を送るのでも、まず被災地のことを知らなくてはいけないし、そこでどういう被害があったか、どういう場所でどういう人がいるかとか、何も知らなければ、もし自分がそういう目に遭ったときに何をすればいいかもわからないし、支援をするときにも何を送ればいいか、何をしたらいいかもわからないので、まず知ること、考えることが基本、それが大事だなと思いました。知るために話をしたり文章を書いたり、映像や写真などいろいろな方法があるんですが、やっぱり現地で見ないと感じられないこともあるので、いろんな年代のいろんな人が現地へ行く機会があったらと思います。

これはまだ、私たちの考えなんですけど、生徒や子どもたちがボランティアに参加していることは多くあると思うんですが、逆に教師の立場の方が行くというのが、あまり見たこともないし聞いたこともなくて、生徒たちが自主的に行くだけではなくて、学校で災害に遭うこととかが多いと思うんですよ。1日の中で学校で多くを過ごすし、ほぼ毎日通う中で、学校で何も対策をしていなければ、生徒はどうしたらいいかわからない。高校生、中学生なら自分で行動できても、小学校だったら1年生、2年生は、あ、津波だ、地震だと思っても、自分で逃げることはちょっと

難しいと思うんですね。なので、教師の立場の人がきちんとして、もしものときにどういうふうに子どもを誘導して逃げて、その後どうすればいいか、いろんな立場の人がこのときのことを考えて知ることが大事だと思いました。

【市民】 私たちは3.11を経験した石巻などと比べたら、ここら辺、このあたりは被災の程度は違うけれど、でもやっぱりいろんなところでいろんな場所で、みんなそれぞれ過ごしている中で地震の被害に遭いました。それを伝えていく、これから伝えていくのは、この3.11を経験した私たちなので、その義務というか、使命があると思うので、少しでも細くでも、つなげていく、伝えていく、これが大事だと思います。

【平井市長】 はい、いいですかね。ありがとうございました。（拍手）何か高校生、すごいね。びっくりだね。自分が高校のとき、こんなじゃないよなって思いながら聞きました。あと2グループかな、どっち。じゃあ、先にどうぞ。

【市民】 僕たちの班は、3つほど意見が出まして、まず1つは、皆さんは多分ハザードマップとか避難とかするときに、家から、それから学校からということ、学校から、職場からということは日ごろから考えていると思うんですけども、実際に地震が起きたときというのは、どこにいるかというのがわからないと思うんです。実際、ツイッターで話していた僕の友達も、電車の中でとまって、5時間とか、かなり待たされたとかいう経験もあって、だからどこにいるかわからないから、いろいろな場所を想定してこれからのことを考えていかなければならないということが1つ上がりました。

2つ目は、先ほど市長の班の若者の世代の方がおっしゃっていたんですけども、若者の世代がやっぱり興味を持つことというのがやっぱり少ないのかなというふうに思います。しかも年齢層も浅くて経験がやっぱりないという世代でもあるので、風化させないようにするためには若者たちの中ではやっているSNSシステムを使ったりして伝えていけば風化しないのかなというふうに意見が出ました。

それから、先ほど言っていた減災というもの、そういうところからいろいろ発信していけばいいなというふうに思いました。最後に、太平洋戦争が当時1945年まであったと思いますが、それを風化させずに今まで残しているのは、広島原爆ドームとか遺産を残したり、それから小学校の教科書でも「ちいちゃんのかげおくり」とか、あと「ヒロシマのうた」とか、さまざまところで伝えていくものがあるからだと思うんです。なので、この地震というもの、復興というもの一つの道ですけど、残していかなければならないものというものもあるのかなというふうに思い



ました。文学作品でやっぱり自分も結構戦争というのを知ったこともあったので、そういうものも教科書とかに載せて、きちんと若い世代、今、地震を知らない世代にも残していかなければならないなというふうに思いました。

ただ、残していくという反面で、一方現地の人たちは、やっぱり思い出したくない歴史でもあると思うので、中庸というか、中間というのは、どの点にあるのかなというのも考えていかなければならないなというふうに思いました。以上です。ありがとうございました。（拍手）

【平井市長】 ありがとうございます。いろんな、とてもいい意見が出てますね。では、最後のグループ。現地ともつながる予定なのでね。

【市民】 こちらのグループでは、まず3.11のときにお台場において、すごく揺れて、ビルも揺れて、でもだれも逃げなかった。その逃げないという人間の…人間だから逃げないという、そこですね。それがまず1つ。逃げられない人間のその部分を、とにかく何とかしなきゃいけない。それからあと、もう一つ出てきたのは、人とのつながり。やっぱり人とのつながりが3.11以後大事だということがわかった。それからあと、やはり命の大切さ、これが3.11でわかった。それとあと、先ほども話したんですけれども、実は減災大学を始めたきっかけというのは3.11ではありません。2010年にチリ地震津波が来ました。逗子は津波警報が出ました。逗子海岸にいた人、逃げないんです。みんな逃げない。それで私は、これじゃまずいよ。小学生対象の授業をつくらなくちゃいけない。1年間ずっとそればかり話していました。3月になって、協働事業があるというので、応募して、その決めた1週間後に3.11があった。結果的にそういうことだったんですけれども、やっているうちにこれ、津波だけじゃないなということで、現在に至っております。

最近思っていることですがけれども、きのう地震があったけど、あれは今まで起きてないところでありました。しかも非常に深いところであって、もっと大きく言うと、今、地球規模で、地球の進化の中で起きているできごとがあるわけですね。それで地震がいっぱい起きている。そういうところだからこそ、学校でぜひ小学生のうちから、もう授業の中に入れてほしい。または、難しければ社会見学、こういうときに露頭が見える城ヶ島とか、そういうところに行って、もし必要であれば活断層調査会、城ヶ島探検マップもつくっています。みんな行きますので、ぜひそういうところからでも子どもたちに、実際に目で見て地球は今こうだよと、こうやって動いているんだよということがわかるようにしてほしいなと思いました。やっぱり災害が起きたら、いろいろ皆さん高校生とかすごくよく頑張ってくれて、私、すごくうれしく思いました。でも、やっぱりそれに加えて、今、地球で起きていること、こういうことをもっとみんなが知っていたらと思

いました。

あと何かありましたら。

【市民】 おまけです。ごめんなさい。日中戦争を経験なさった方いらっしゃいますか。太平洋戦争は。蟹江さんね。じゃあ同年配かもしれない。どのように伝えていくべきかというのを今、蟹江さんお話しくださいましたけれども、間接体験というのは直接体験には私ならないと思うんですよね。いくら言葉で伝えていっても、なかなか自分のものにならない。それをやっぱり小学校のときから、さっきおっしゃったように、学問を通してでも何でもいいから、理論的に話をし、こういうことが起こり得るんだよということを、まず頭に入れておく。そういうことも大切なことかなと思っています。

それから、これはおまけ。太平洋戦争は人災です。今回は天災です。そこで人災の時代に生きて私たちは、小さいときからこんな歌を聞かされました。これね、人の関係。人とのつながりを大切にということで、隣組の歌。2つ、1番。「とんとんとんからりんと隣組。格子をあければ顔なじみ、回してちょうだい回覧板、知らせられたり知らせたり」、これが1番ね。2番。「とんとんとんからりんと隣組。地震に雷、火事、泥棒、互いに役立つ用心棒、助けられたり助けたり」、これが2番。この精神で町内会がつながっていました。かぎを閉めないで出ても、泥棒は入らない。御飯が足りなくなったら隣へ「ごめん、御飯貸して」って行けた。非常に平和な時代でした。でも、これはやっぱりね、とても私たち生きていくのに助けられた。隣組が今、つながっていない。なぜかなと考えたときに、回覧板は全部ポストです。ポストに入れてポストから出す。手渡しがなくなった。これも一つ大きな人とのつながりを絶っていった便利さの裏返しじゃないかなと思っています。つまらないことを申し上げましたが、人のつながりってとても大切だと思っています。以上です。（拍手）

【平井市長】 はい、ありがとうございました。

【市民】 すいません、1つよろしいでしょうか。これ、伊東市の図書館で復刻されたものです。何かと読みますと、宇佐美尋常高等小学校、大正12年9月伝、大正大震災付記9月1日に起きた地震の作文です。全員の作文を小学校の先生がガリ版を切って、それを本にしたもの。これが復刻されています。こういうものがありますので、ぜひ。あと思ったんですけど、3.11の記録って、あるのかな。一応活断層調査会は全員から、もうすぐ場所と、それから感想を全部書いてもらったんですけど、そういうのって風化させないためにも大事な。でも、今からでも遅くないから、そんなのつくったらどうかなと思います。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。さあ、時間がなくなってきた。つながってますね。聞こえますか。

【S k y p e】 聞こえますよ。

【平井市長】 今、どこで何をしているのかな。

【S k y p e】 先ほどまでは被災された方の実際の体験談をじかで聞かせてもらいました。

【平井市長】 どんな話で、どんな感想ですか。

【S k y p e】 そうですね、ちょっと僕だけ話すのも何なんで、隣の方に渡したいと思います。

【S k y p e】 実際、テレビやニュース、新聞とか、メディアで聞くようなものではなく、生の声で体験談を聞いたということで、とてもためになりました。

【S k y p e】 聞こえてますか。

【平井市長】 聞こえてますよ。どんな話だったか、ちょっとだけでも説明してくれるとありがたいんだけど。

【S k y p e】 被災したときに、子どもと自分の親の命と、どう選んで、どっちに守りに行くかという内容で、とてもちょっと重い内容だったんですけども、聞いたら、もし自分が同じようなことに遭ったとき、どう判断して、どう行動したらいいのか、考え直すきっかけになりました。

【S k y p e】 ところどころでとても自分が実際のその状況になってみたらというのを考えると、とても胸が苦しくなりました。それで、確かにNHKとか何かで実際のドキュメンタリーとか何かで実際の話聞けるというのは、皆さん方に間接的には確かに伝わっていると思うんですね。ですが、目の前で実際の声を通して話を聞くというのは、語り部さんの気持ちがとてもダイレクトに、肌に伝わってきますので、涙を流されているというのはそうなんですけれども、それ以前に何か訴えかけるようなものがひしひしとこちらのほうに伝わってきました。とても、最後はちょっと明るく締めくれたんですけども、僕らとしてはこれをとにかく真摯に受けとめて、ちゃんと伝えていく、いろんな人に波及していくということをしていこうかなと感じましたね。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。ほかにだれかしゃべりたい人、聞きたい人、いる。じゃあ1人だけ。

【市民】 すいません、もう3年もたっているのですけれど、やっぱり物質的なものよりも心の面でいろいろ大変な思いをしていらっしやる…。

【S k y p e】 すいません、ちょっと聞こえません。

【市民】 心の面で大変な思いをしていらっしゃる方もいるのではないかと思います。心です、精神的な面。

【平井市長】 被災者の方で、心でね、大変苦しい思いをしている人の声というのをどう感じましたか。聞こえないかな。

【S k y p e】 被災された方の心苦しい中で僕たちはどう感じたかということですね。

【平井市長】 そうです、そうです。

【S k y p e】 そうですね、同情という言葉で一言で片づけていいものではないんですけども、やはり共感というものはするんですね。でも、やはり当時その場所にいた人たちと同じ気持ちになることは確かにできないかもしれませんが、やはりその気持ちを少しだけでも、ちょこっとだけでも共有したりとか、分かち合ったりとかするのは、とても大事なことなんじゃないかなと思っています。

それで、この少しでもわかったこと、これで話を聞いて、教訓というか、少なからずも皆さん絶対何か授かるようなものがあるんです。これをこれからまとめまして、これから逗子に持ち帰ろうと思いますので、どうぞ待っていてください。必ず仕上げてみせます。そんなところですかね。はい。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。（拍手）すばらしい。じゃあ、きょうの午後、あしたと、しっかりとまた見てきて報告してください。楽しみにしています。（拍手）

現地で本当に生の声を聞いた、とてもすばらしいトークだったね。それで今、いろんなグループの人から、それぞれの話した内容をお話いただきました。伝えることの大切さ、それから地域でつながることの大切さ、小学生に向けていろいろと話をする場面、つくったらいんじゃないか。いろんなことを御意見いただいたので、とてもこれからの取り組みにもね、大いに生かせるかなというふうに思います。さっきこちらのグループでも、せっかくいろんな団体が行ったり支援したり、感じたり体験したり、つながっていたりということがあるので、何かそれを一つのプログラムみたいにして、だれでもそれが伝えられるようなツールみたいなものがあるといいなという話をしました。それを例えば小学校に皆さんが行って、それを授業でやったり、あるいはそういうセミナーみたいなものでやったりと、なかなかこのままでは消えてなくなっちゃう。でも、それは記録して、それを何か伝える手段に、ちゃんと落とし込んでおく。それをみんなで共有できるような何かものができたらいいなということを感じました。今回行った高校生たちは、ちゃんと報告をDVDかな、ビデオにまとめたり、報告書としてまとめたりして、それをホーム

ページとか、あるいはユーチューブとか動画サイトなんかにアップして、世界に発信していくという、そのための準備もして今回石巻と女川に行っていますので、それも一つの手段として、とてもいい、有効な取り組みかなと思います。先ほどツイッターとか、いわゆるSNSという今、最先端の、そういう情報ツールを使ってつながることの必要性、それからフェイス・ツー・フェイスで、隣組という歌を御披露いただきましたけれども、日ごろの顔の見える関係の中でお互いを知って、そこでもしものときに備える、あるいは被災地に対しても何らかの自分なりの行動を起こしていく。そんなことの大切さもお話いただきました。たまたまここにいた高校生は、横須賀の在住で、逗子の高校に通って、去年、派遣に行っただけですけど、横須賀ではなかなかこういう機会ってないし、情報もないっていうんです。逗子はやっぱりこの5万8,000人と小さいまちで、いろんな人がいろんな活動をしていて、それがお互いがつながっている。あるいは共有する場があるというところは、とてもある意味、逗子のよさでもあるし、学校とどうつなぐかという話もありましたけれども、そんなふうに広がっていくと、よりいいかなというふうに思いますね。

どうぞ、もうちょっと時間過ぎているんですけど、何か言いたいことがあれば、皆様から御意見をいただければと思うんですけども。

**【市民】** お願いします。私、見守りサポーターをさせていただいているんですが、高齢の方に話しかけましたら、自分たちはもう年だから助けてくれなくてもいいというような発言があったんですね。それこそ東日本大震災が教えてくれたことではないかと思うんです。そういう迷惑かけるんだから、迷惑かけたくないとか、はるかに迷惑になるということ。やっぱりそういうところをもっと高齢の方にわかっていただくような機会を、例えば老人会とか、あるいは広報でとか、そういうようないろんなところにもっていただければ、本当に「お互いさま逗子」ですから、そういうふうに助けられ上手は助け上手だということも、もっと皆さんに知っていただいて、本当に何ていうのかな、それからやっぱり一番忘れやすいのは、障がい、弱者だと思うんです。これは年に関係なしなんでしょうか、弱者ということ。ですから、やっぱりそういうことも皆さんのどこかにおさめておいていただきたいです。

**【平井市長】** はい、ありがとうございます。まだまだ多分言いたいことたくさんあると思うんですけども、もうお時間になったので、きょうはこれで終わりたいと思いますけれども、本当にきょうは高校生の皆さんがとても大活躍でした。やっぱり去年行って、すごく自分なりに感じたものというのを継続して、ましてやいろんなところで活動も広がっているというところで、

私たちもとても心強いというか、頼もしいというか、こういった若い人たちがどんどん成長して、これからの社会を本当に中心で引っ張っていく。そういう人間にこれからもっともっと大きく成長してほしいし、世界に発信して、この東日本大震災というのをもっと世界中から、いろんな意味で注目をされたし、いろんな支援も受けたし、教訓としてのいろんなことを学んでいると思うので、ぜひこの逗子からこれも発信していければなど、そんなふうに感じました。

きょうは本当にありがとうございました。とてもいい会でした。（拍手）

**【福本課長】** 本日の予定は以上となります。皆様、本当にお疲れさまでした。そしてありがとうございました。最後をお願いと御案内です。まず、次回のまちづくりトークなんですけれども、海水浴シーズンが始まる6月に予定しています。安全で快適な逗子海水浴場を目指すということテーマを開催します。細かい日程は今、ちょっと調整中ということで、また御案内差し上げます。「広報ずし」ですとかホームページ、チラシ等をごらんになっていただいて、ぜひ御参加いただけたらなと思います。

あともう1つ最後をお願いします。アンケート、お手元にあるかと思います。ぜひ御意見をいただきたいと思います。会場出口付近でいただきますので、よろしく御協力お願いいたします。

では、以上で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）